

タブロイド地域紙「市民プレス」第62号（2013/10/5発行）の電子版として再編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。またご利用の環境によっては、電子書籍の閲覧ができない場合がございます。

目次	
-PAGE 2	武家政権を確立したこの人源頼朝（その二）
-PAGE 7	治承・寿永の乱はじまる
-PAGE 13	義経は平泉から駆けつける
-PAGE 26	政務・財政の機構をつくる
-PAGE 33	文治の勅許
-PAGE 35	満州への旅 深瀬克

武家政権を確立した この人源頼朝 その二

流人^{るにん}となって伊豆へ

源義朝は平治の乱で平家に敗れ、永暦元年（1160）二月、京都の六波羅に送られた義朝の嫡男、頼朝の処罰は死刑が当然とされた。ところが、平清盛の継母・池禅尼の嘆願などによって死一等を減ぜられ、流刑となる。

三月に伊豆国・蛭島^{ひるしま}（蛭ヶ小島ともいわれる。現・静岡県伊豆の国市四日町か？）へと流された頼朝は、流人とはいえ、乳母の比企尼や、母、由良御前の弟に当る祐範^{ゆうはん}（「すけのり」とも読む。熱田大宮司・藤原季範^{すえのり}の子で僧侶）の援助を受けたので、狩りを楽しむなど自由な生活をしていったようだ。しかし正確な記録はない。

比企尼と頼朝との絆が・・・

鎌倉幕府の成立に深く関わりをもった比企尼（父母や実名は不詳）について、『吾妻鏡』には、武蔵国比企郡の代官となった夫の掃部允^{かものじょう}と共に京から下った、と記されている。頼

朝の乳母となったのは、頼朝の実母、由良御前と都との繋がりには拠るのではないか、との推測もあり、東国に移った比企尼は、以後二十年の間、伊豆国の流人・頼朝に仕送りを続けた。

比企尼の長女は・・・

比企掃部允と比企尼との間に男子は無く、三人の娘はそれぞれ有力御家人に嫁いだ。長女の丹後内侍は、京の二条院に女房として仕え、東国に下って安達盛長の妻となった。のちに治承六年（1182）三月九日、頼朝の妻、北条政子が嫡男を懐妊した際、着帯の儀式で給仕を務めている（『吾妻鏡』…御臺所御着帯也）。

次女の河越尼は・・・

比企尼の二女は秩父党の嫡流、河越重頼に嫁いたの

で、河越尼と呼ばれる。頼朝が鎌倉に拠点を構えて三年目となる寿永元年（1182）八月、頼朝の嫡男（のちの頼家）が誕生したとき、河越尼は、産所であった比企能員（比企尼猶子）の邸に乳母として召され、最初の乳を含ませる乳付けの儀式を行なった。

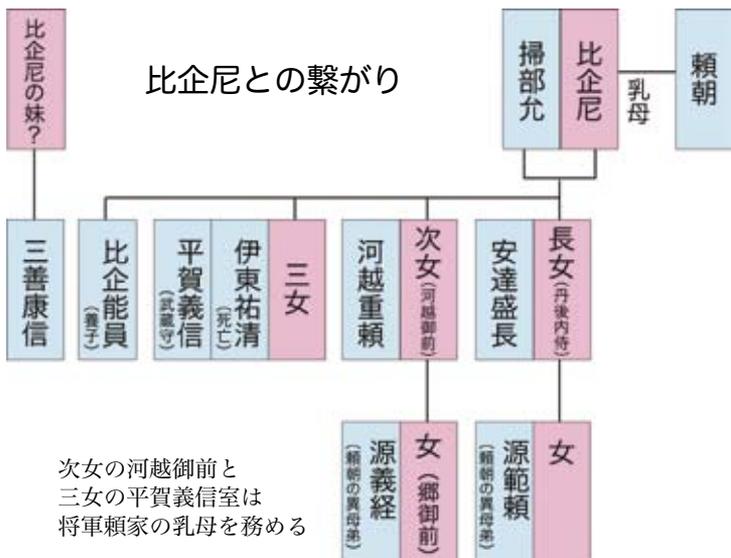
また翌々年の元暦元年（1184）九月には、頼朝の命によって、娘の郷御前は源義経の正室として上洛する（『吾妻鏡』には、父親の河越重頼の家子、即従三十騎がお供したと記されている）。

また三女は・・・

実名、通称ともに不明。伊豆国の豪族・伊東祐親の次男で、流人だった頼朝と親しかった伊東祐清の室に、しかしのちに平賀義信室となる。平賀は元暦元年六月、頼朝の推挙によって武蔵守に任官して守護も兼ね、善政を敷いた人物で、妻となった比企尼の三女は二代将軍・源頼家の乳母となった。また平賀は、御家人の筆頭の座を占め、正治元年（1199）に頼朝が亡くなった後も、源氏一門の重鎮として重きをなした。

何人もの側近が頼朝に仕えた

その筆頭は、比企尼の長女と結婚した安達盛長である。また敗れた源氏方だったために、



所領の近江国を失い、放浪の身となった佐々木定綱ら四兄弟も、流人だった頼朝の従者として奉仕した。因みに、後の治承四年（1180）十月、富士川の戦いで戦功を挙げた定綱ら兄弟は、論功行賞によって、旧領の近江国佐々木庄を安堵されている。

流人として頼朝の日々は・・・

この地方の霊山である箱根権現、走湯権現（箱根、伊豆山の山岳信仰か）に帰依して読経を怠らず、亡父・義朝や源氏一門を弔いながら、頼朝は、一人の地方武士として日々を送っていた。しかしその間にも、頼朝の乳母（比企尼か？）の甥に当る三善康信（太政官の書記官役）から、定期的に京都の情報を得ていたことが、『吾妻鏡』に記されている。

三善康信はその後・・・

治承四年（1180）五月、後白河天皇の皇子、以仁王が挙兵した二ヶ月後、彼は頼朝に使者を送り、諸国に源氏追討の計画が出されているので早く奥州に逃げては、と提案するなど、頼朝の挙兵にも大きな役割を果たす（『吾妻鏡』）。

その四年後の元暦元年四月に、頼朝から鎌倉に呼ばれた康信は、鶴岡八幡宮の廻廊で対面し、頼朝から、鎌倉に居住して政務の補佐をするように依頼されている。頼朝が亡くなった後も、後家の北条政子や執権・北条義時と協調して幕政に参与した。

流刑地での自由な暮らしは・・・

フィクション性が高いとされているが、『曾我物語』に、次のような記述がある。

伊豆国伊東の豪族、伊東祐親は親平家方だったので、配流されてきた源頼朝の監視を任されていた。仁安二年（1167）頃、頼朝は当時二十一才だった。後に家人となる土肥実平、天野遠景、大庭景義などが集まって、狩や相撲が催されたという。しかし祐親が大番役で上洛している間に、三女・八重姫と通じ、やがて男子を儲けて千鶴御前と名付けた。御前が三歳になった時、大番役を終えて京から戻った祐親は激怒し、頼朝の殺害を図った。ところが、頼朝の乳母・比企尼の三女を妻としていた伊東祐親の次男、祐清が頼朝に知らせたので、頼朝は馬に乗って熱海の走湯権現（伊豆山権現・現熱海市）に逃げ込み、ことなきを得たという。頼朝は二十九才。

北条政子を正妻に迎える・・・

三十一才になって、今度は、伊豆国の在地豪族で、頼朝の監視役に当たっていた北条時政の長女、政子と通じる。政子は保元二年（1157）生まれで、そのとき二十一才、大番役のため時政が在京中のことであつた。

平家に知られることを恐れた時政は、伊豆国目代の山木兼隆に嫁がせるべく、政子を彼のところへ送つたが、政子はその夜の内に抜け出し、頼朝の妻となつたという。政子は、まもなく長女・大姫を出産する。治承二年（1178）頃のことと推定されている。時政も二人の結婚を認め、北条氏は頼朝の重要な後援者となる。

治承・寿永の乱はじまる

治承四年五月、以仁王の挙兵を契機として、平清盛を中心とする平氏政権に対する反乱が各地で起こり、大規模な内乱となる。元暦二年（1185）三月、壇ノ浦の戦いで平氏が滅亡するまで、ほぼ六年間にわたつた。治承・寿永の乱という。また、源平合戦あるいは源平の戦いともいわれる。

後白河天皇の皇子、以仁王が平氏追討を命ずる令旨を諸国の源氏に発し、四月には、伊

豆国の頼朝にも、叔父・源行家ゆきいえから令旨が届けられた。以仁王は五月、源頼政（朝廷や摂関家近くで活動する京武士）らと共に宇治で敗死するが、頼朝はしばらく事態を静観した。このとき頼朝は三十四才、流人となつて二十年が過ぎ去つていた。

頼朝は挙兵を決意する

しかし平氏が、令旨を受けた諸国の源氏の追討を企てていたので、自らも危ういことを悟つた頼朝は挙兵を決意した。安達盛長を使者として、義朝時代から縁故をもつ東国の豪族に協力を呼びかける。すでに述べたように、安達は、源頼朝の乳母、比企尼の長女・丹後内侍を妻とし、彼女は京に知人が多かつたので、京都の情勢を頼朝に伝えていた。また『曾我物語』によると、頼朝と北条政子の間を取りもつたのも安達盛長だつたといわれている。



源頼朝 木像

文保三年（1319）の銘あり。源頼朝は信濃善光寺を復興した大檀那として知られ、信州・甲州の善光寺には、かつて源三代將軍堂があつた。甲州善光寺

頼朝の文官としての信任

頼朝の旗挙げの直前の治承四年八月、安達盛長の推挙で頼朝に仕えた藤原邦通は、頼

朝の旗挙げの初戦となった山木兼隆襲撃の直前に、酒宴にかこつけて兼隆の館に留まり、周囲の地形を絵図にして持ち帰り、それを基に頼朝達が作戦を練ったという。

かつて官吏であった藤原は、有職故実や文筆に長じ、その後頼朝の下で右筆（秘書役の文官）、公事奉行人、供奉人を務めた。

緒戦では石橋山で敗北する・・・

最初の標的は伊豆国目代・山木兼隆と定められ、北条時政らは、葦山にある山木の屋敷を襲撃して兼隆を討ち取った。

伊豆を制圧した頼朝は、北条義時（北条時政の次男）、土肥実平、佐々木兄弟、天野遠景、大庭景義らを従えて、相模国土肥郷に向かった。三浦義澄、和田義盛らの三浦一族も頼朝に参じるべく三浦を発した。しかし三浦軍との合流前、八月二十三日、石橋山で戦い、頼朝の軍三百騎は、平氏方の大庭景親、熊谷直実ら三千余騎、背後を塞いだ伊東祐親と戦って敗北し、土肥実平ら僅かな従者と共に山中に逃れ

た。畠山重忠、河越重頼、江戸重長ら平家方の大軍が三浦半島に押し寄せ、三浦一族は本拠の衣笠城で防戦するが支えることができず、城を捨てて船で海上へと逃亡する。また数日間の山中逃亡の後、死を逃れた頼朝も、真鶴岬から船で安房国へと脱出した。

関東平定に向かって

八月二十九日、安房国平北郡狛島（現・千葉県安房郡 鋸 南町）

に上陸した頼朝は、房総に勢力を持っていた上総広常と千葉常胤に使者を遣って、加勢を要請した。九月十三日には、安房国から上総国に、さらに十七日には下総国府に向かい、下総国府で千葉一族と合流した。十九日には広常が大軍を率いて参上し、上総・千葉両氏の支持を受けた頼朝は、十月二日、太井・隅田の両河を渡る。

武蔵国に入ると、葛西清重、足立遠元に加え、一度は敵対していた畠山重忠、河越重頼、江戸重長らをも従える。十月六日、かつて父・義朝と兄・義平の住んだ鎌倉に入り、大倉の地に居宅を構えて政治の拠点とした。

また先祖の源頼義が京都郊外の石清水八幡宮を勧請した鶴岡八幡宮を北の山麓に移し、



頼朝挙兵（1180年）

- | | |
|-------------|--------|
| 1. 挙兵・山木館襲撃 | 8月17日 |
| 2. 石橋山の戦い | 8月23日 |
| 3. 衣笠城の戦い | 8月26日 |
| 4. 真鶴岬出航 | 8月28日 |
| 5. 安房国着 | 8月29日 |
| 6. 千葉常胤参陣 | 9月17日 |
| 7. 上総広常参陣 | 9月19日 |
| 8. 鎌倉着 | 10月6日 |
| 9. 富士山麓の戦い | 10月14日 |
| 10. 富士川の戦い | 10月20日 |

父義朝の菩提を弔うために勝長寿院の建立を行なうなど、整備を続けて鎌倉を幕府の本拠としたのである。

平家の追討軍と戦う

十月十四日、甲斐源氏が富士山麓で平家方を破り、十六日、平維盛（平清盛の嫡孫）の率いる追討軍が駿河国に達すると、頼朝は、これを迎え撃つために鎌倉を出発し、翌々日、黄瀬川で武田信義（甲斐源氏の当主）、北條時政らが率いる二万騎と合流した。二十日、富士川の兩岸で、平家の追討軍と対峙したが、その夜、武田信義の部隊が平家の後背を衝こうとした。富士沼の水鳥がそれに反応して一斉に飛び立ち、『吾妻鏡』には「その羽音はひとえに軍勢の如く」とある。これに驚いた平家方は大混乱に陥った（吾妻鏡の記述には誇張がある）。その夜平氏軍は突如撤退し、大規模な戦闘が行なわれなまま富士川の戦いは終結する。

翌日、頼朝は、平氏を追って上洛するよう部下に命じた。しかし、千葉常胤、三浦義澄、上総広常らは、常陸国の佐竹氏らが未だ従わず、まず東国を平定すべきであると諫めたので、頼朝はこれを受け容れて、黄瀬川の宿（現・静岡県駿東郡清水町）に兵を返した。この

日、源義経が頼朝の許に参じた。

義経は平治元年に誕生して

「牛若丸」と名付けられる。翌二年（1159）、父・義朝が敗死。応保二年（1162）の頃、母・常盤が一条長成と再婚したので、嘉応元年（1169）、十一才、鞍馬寺で稚児となる。『平治物語』では近江国蒲生郡鏡の宿で元服したとあるが、『義経記』によると、父義朝の最期の地でもある尾張国にて元服し、源氏ゆかりの通字である「義」の字と、初代経基王の「経」の字を以って実名を義経としたという。



源義経の肖像画

『義経記』で藤原泰衡に襲撃された場面が、武装した弁慶の肖像と対に描かれている。戦国時代か江戸時代の作。中尊寺所蔵

『義経記』は、源義経とその主従を中心に書いた軍記物語で、南北朝時代から室町時代初期に成立したと考えられている。能や歌舞伎、人形浄瑠璃など、後世の多くの文学作品に影響を与え、今日の義経やその周辺の人物のイメージの多くは『義経記』に準拠している。

義経ほかの登場人物が生き生きと書かれているが、彼らの死後二百年以上経ってからの成立

なので、作者が彼らの人柄を知っていたとは考えられないので、当時の伝説と作者の創作によって成立したと考えられる。軍記物語ではあるが、『平家物語』のように華々しい合戦に重点が置かれているのではなく、義経の幼少期・出世・没落の時期に重点が置かれており、まさにタイトル通り源義経の物語りである。

義経は平泉から駆けつける

承安四年（1174）、十六才、元服した義経は奥州平泉へ下った。兄・頼朝が挙兵するや、その幕下に入るべく、治承四年十月、平泉を出奔して駆けつけた。藤原秀衡から差し向けられた佐藤継信・忠信兄弟他数十騎が同行し、富士川の戦いで勝利した頼朝と、黄瀬川の陣（静岡県駿東郡清水町）で涙の対面を果たす。

勲功に報いる

富士川の戦いの帰途、相模国府で初めての勲功の賞を行い、捕えた大庭景親を処刑する。次いで佐竹秀義を討つべく鎌倉を発し、十一月四日に常陸国府に至る。戦いは、上総広常の活躍により秀義を逃亡させて終わった（金砂城の戦い）。頼朝は秀義の所領を勲功のあつ

義経参上・『吾妻鏡』治承四年（1180）十月小廿一日庚子より

今日。弱冠一人。イ御旅館之砌。稱可奉
謁鎌倉殿之由。實平。宗遠。義實等恠之。
不能執啓。移尅之處。武衛自令聞此事給。
思年齡之程。奥州九郎敷。早可有御對面者。
仍實平請彼人。果而義經主也。即參進御前。
互談往事。懷舊之涙。就中。白河院御宇
永保三年九月。曾祖陸奥守源朝臣〔義家〕
於奥州。与將軍三郎武衡。同四郎家衡等遂
合戰。于時左兵衛尉義光候京都。傳聞此事。
辭朝廷警衛之當官。解置弦袋於殿上。潛下
向奥州。加于兄軍陣之後。忽被亡敕訖。今
來臨尤協彼佳例之由。被感仰云々。此主者。
去平治二年正月。於襦袢之内。逢父喪之後。

〔読み下し〕 今日弱冠一人御旅館之砌にイむ。鎌倉殿に謁し奉る可し之由を稱す。實平、宗遠、義實等之を恠み、執啓に不能、尅を移す之處、武衛自ら此の事を聞か令め給ひ、年齢之程を思ふに奥州の九郎敷。早く御對面有る可し者。仍て實平彼の人を請す。果而、義經主也。即ち御前に參進し、互いに往事を談じ、懷舊之涙を催す。就中に、白河院の御宇、永保三年九月、曾祖陸奥守源朝臣〔義家〕奥州に於て、將軍三郎武衡、同じき四郎家衡等与合戰を遂ぐ。時于左兵衛尉義光、京都に候て此の事を傳へ聞き、朝廷警衛之當官を辭し、弦袋を殿上に解き置き、潛に奥州へ下向し兄の軍陣に加はる之後、忽ち敵を亡ぼ被訖。今來臨、尤も彼の佳例に協う之由、感じ仰せ被ると云々。此の主者、去る平治二年正月、襦袢之内に於て父の喪に逢う

依繼父一條大藏卿〔長成〕之扶持。爲出家登山鞍馬。至成人之時。頗催會稽之思。手自加首服。恃秀衡之猛勢。下向于奥州。歷多年也。而今傳聞武衛被逐宿望之由。欲進發之處。秀衡強抑留之間。密々遁出彼館首途。秀衡失恪惜之術。追而奉付繼信忠信兄弟之勇士云々。

ののち之後、繼父一條大藏卿〔長成〕の扶持に依て、出家を爲し、鞍馬に登山す。成人に至る之時、頗りに會稽之思を催し、手づ自り首服を加へ、秀衡之猛勢を恃み、奥州于下向し、多年を歴る也。而るに今武衛宿望を逐げ被る之由傳え聞き、進發せんと欲する之處、秀衡強いて抑留する之間、密々彼の館を遁れ出て首途す。秀衡恪惜之術を失う。追つて而して繼信忠信兄弟之勇士を付け奉ると云々。

〔要約〕今日、一人の若者が宿泊所の入口に立つて、鎌倉殿にお会いしたいと云う。土肥實平、土屋宗遠、岡崎義實は、怪しく思つて取り次がなかったが、時が経つて、頼朝様がこの話を聞き、年齢を考えると奥州の義経かも知れない。早く対面しようと言つた。そこで、土肥實平はこの人を招き入れたところ、やっぱり義経だつた。直ぐ御前に進んでお互いに昔を語り、懐かしの涙を流すのだった。

中でも、白河上皇の時代の永保三年（1083）九月、先祖に當る陸奥守義家が、奥州で征夷將軍清原三郎武衡・清原四郎家衡と合戦をしていたとき、弟の佐兵衛尉新羅三郎義光は京都に居てこのことを聞き知り、朝廷警護の官職を辞職して、朝廷から授けられている弓弦の袋を投げ出して、朝廷には内緒で奥州へ出向き、兄の軍隊に参加したので、間も無く敵を滅ぼすことが出来た。今日ここへ来たのは、そのときの良き例に似ていると感動しておつしやられた。

この義経殿は、平治二年正月に、まだねんねの中にいる内に父の死にあつた後、繼父の一条長成に育てられ、出家させるため鞍馬山に預けられた。成人になつた時には、父の仇討ちをしたいと思ひ込み、自分で元服をして、秀衡の力を頼つて奥州へ出かけ、年月を重ねたのであつた。而るに今兵を集めて宿望を遂げるときと伝え聞き、戦を進めようとしたのだが、秀衡が強いて引き止めたので、密かに彼の館を遁れ出て旅立つことにした。秀衡は術を失ない、繼信・忠信兄弟という勇士を付けてくれたという。

た家人に与え、鎌倉に戻ると、和田義盛を侍所の別当（長官）に任じた。十二月には、鎌倉大倉の地に頼朝の御所が完成し、その入御の儀式で義盛は、居並ぶ御家人の最前に立った。

平氏の激しい反撃

伊予国の河野氏、近江源氏、甲斐源氏、信濃源氏が拳兵し、その年の暮れには各地で動乱が起つたので、対抗する平氏は、平清盛によつて去る六月、摂津国の福原に移された行宮（一時的な御座所）を京都に戻して反撃に転じた。

福原京の計画は・・・

当時、多くの反対を押し切つて福原（現・神戸市）に遷都を強行したのは、大輪田泊（現・兵庫港・神戸港西部）に人工島（経ヶ島）を築き、整備拡張した港を見下ろす山麓に都を置いて平氏の拠点とする計画によるものであった。

平重衡は南都を制圧する

清盛は、公然と反平氏活動を始めた寺社の勢力を制圧するため、平重衡（清盛の五男）

に命じて、十二月、園城寺を攻撃して焼き払う。さらに大軍をは南都に向かい、興福寺衆徒はこれを迎え討つたが、重衡の四万騎は、防御陣を突破して攻め入り、火を放つた。興福寺、東大寺の堂塔伽藍は、残らず焼き尽され、多くの僧侶が焼死した。このとき、東大寺の大仏も焼け落ちた。

平清盛の最期

一方、翌年の治承五年（1181）（7/14日改元して養和元年）（「養和」は、安徳天皇の時代の年号だが、源氏方では、この元号を使用せず、引き続き「治承」を使用していた）には、肥後国の菊池隆直、尾張国に拠る源行家（義朝の弟）、美濃国の美濃源氏一党なども平氏打倒の兵を挙げ、反平氏の活動はより一層活発化した。このような中で、清盛は新体制を築こうとして、畿内近国の惣官職を置いて宗盛を任じ、臨戦体制を築いた。しかし、その混乱のさなか、熱病に倒れた。

死期を悟つた清盛は、自分の死後はすべて宗盛（清盛の三男）に任せたとを法皇に奏上し、閏二月四日に九条河原口の平盛国の屋敷で死亡した。享年六十四才。

つづく平氏の攻撃

全国的な反乱は続き、平氏は平重衡を総大将として尾張以東の東国征伐に向かう。四月、源行家らを尾張・美濃国境付近の墨俣川すのまたがわ（現長良川）の戦いで破り、美濃・尾張は平氏の勢力下に入った。頼朝は和田義盛を遠江に派遣するが、平氏はそれ以上は東に兵を進めず都に戻る。

頼朝の和平提案は・・・

一方、頼朝はその年の七月頃、朝廷に対して謀反の心は無く、また平氏と和睦することを厭わないという趣旨の書状を後白河法皇に対して送った。しかし清盛の継室・平時子の長男だった宗盛むねもり（重盛、基盛につづく清盛の三男）は、清盛の遺言を理由として和平提案を拒否した。宗盛は奥州の藤原秀衡を陸奥守に任じて頼朝の牽制に期待したようだ。

源平の争いは膠着するが・・・

このころ、遠江国では甲斐源氏の安田義定が独立の立場をとり、奥州藤原氏の動向も定かではなかったため、頼朝は平氏と直接対峙することはなかった。

養和の飢饉

前年、降水量が極端に少なかったため、早魃のため農産物の収穫が激減し、翌年には京都を含め西日本一帯が飢饉に陥った。大量の餓死者が発生して、地域社会が崩壊し、混乱は全国的に波及した。

鴨長明の『方丈記』をはじめ、『源平盛衰記』や『玉葉』（公家九条兼実の日記）などに、当時の状況の詳しい記述がみられる。

頼朝の嫡男誕生する

同年八月、頼朝の妻、北条政子は、嫡男の頼家を出産した。のちに頼朝の跡を継いで、鎌倉幕府第二代将軍（鎌倉殿）となる男子の誕生である。

頼朝は東国を支配下に・・・

寿永二年（1183）二月、常陸に住む叔父・源義広（志田義広）が、足利忠綱らとともに、鎌倉に対して兵を挙げた。その頃、主な御家人は平氏の襲来に備えて駿河国に在ったため、対応に苦慮した頼朝は、小山朝政らに迎撃を託し、自らは鶴岡八幡宮で東西の戦い

が落着くことを祈った。朝政らは下野国の野木宮（現・栃木県下都賀郡野木町）の合戦で義広らを破り、頼朝の異母弟である源範頼らが残敵を掃討した。ここに、頼朝に敵対する関東の勢力は消滅した。

頼朝は木曾義仲と戦う

源義仲（木曾義仲とも）の生誕地は、現在の埼玉県比企郡嵐山町といわれる。源頼朝の従兄弟だが、父が頼朝の長兄に当たる源義平の襲撃を受け、武蔵国の大蔵館で殺害されたため、乳人中原兼遠のもと、信濃国の木曾で育てられた。

治承四年（1180）、以仁王の令旨を受けて信濃国から挙兵し、上野国に進出した。しかし義仲は、頼朝に従わぬ頼朝の叔父、源義広・行家を庇護したため、頼朝と武力衝突寸前の間柄となった。寿永二年三月、両者は話し合い、頼朝の長女・大姫の婿として、義仲が嫡子・義高（十一才）を鎌倉に送るという和議が成立した。



源義仲（木曾義仲）像

長野県木曾郡木曾町 德音寺所蔵

俱利伽羅峠の戦いで義仲は勝利

そのころ、飢饉が小康状態となつて、平氏は北陸の反乱勢力を討つために、平維盛（平清盛の嫡孫で、重盛の嫡男）が率いる大軍を派遣する。平氏軍は越前・加賀の反乱勢力を撃破するが、五月、加賀・越中国境の俱利伽羅峠（現・富山県小矢部市―石川県河北郡津幡町）で、義仲軍に敗北する。

頼朝の上洛を望む

七月、義仲軍は京都に迫り、都の関門、延暦寺との交渉を始めた。ついに京都の防衛を断念した平宗盛は、一門を引き連れて、福原から海路を西へ落ち延びる。義仲軍は上洛を果たしたが、期待された都の治安は改善されず、前年の飢饉のため食糧が不足し、市中では略奪や狼藉が横行する。義仲の評判は落ちて、頼朝の上洛を願う声が高まっていった。

頼朝の東国支配が公認される

頼朝は藤原秀衡と佐竹隆義に鎌倉を攻められる恐れがあること、また数万騎を率いて入洛すると、都の機能は止まってしまうであろう、として要請を断り、使者を返した。十月

九日、朝廷は平治の乱で止めた頼朝の位階を復し、また十四日には、東国における荘園・公領からの官物・年貢納入を保証させるとともに、頼朝による東国支配権を公認した（寿永二年十月宣旨）。

義仲との交戦・・・

備中国水島（現・倉敷市玉島）で平氏に敗れた義仲は、同月十五日、頼朝の上洛を恐れて京に戻る。頼朝に宣旨を下したことを挙げて、後白河院に激しく抗議して、頼朝追討の宣旨の発給を要求する。

一方、十一月には頼朝が送った源義経率いる軍が近江国へと至る。平氏と義経に挟まれた義仲は、後白河法皇を御所の法住寺に拘束して頼朝追討の宣旨を引き出し（法住寺合戦）、翌寿永三年（1184）一月には征東大將軍に任ぜられて、形式的には官軍の体裁を整えた。

しかし同月廿日、源範頼と義経は数万騎を率いて京に向かい、義仲軍と交戦して宇治川の防衛線を突破した（宇治川の戦い）。義仲は京都を脱出しようとするが、六条河原の戦いで再度敗れ、北陸に向けて逃走を試みた。しかし翌廿一日、近江国栗津で源氏軍と遭遇し、義仲は顔面に矢を射られて討ち死にした。

平氏の追討 一ノ谷の戦い

義仲が滅亡するに至るまでの間に、平氏は勢力を立て直し、は大輪田泊に上陸して、かつて平清盛が都を計画した福原まで進出していた。平氏は瀬戸内海を制圧し、数万騎の兵力を擁するまでに回復していた。

廿六日に平宗盛追討の宣旨が下され、京都に駐留していた範頼・義経軍は、福原に陣を構える平氏を攻撃することになった。二月（1184/3月）、範頼・義経軍は二手に分かれて平氏を急襲し（一ノ谷の戦い）、海上へと敗走させて、平重衡（ひらむかひら）を捕え、京に戻った。

義高討たれて大姫は憔悴する

一方、義仲を討った頼朝は、鎌倉に在って、

治承寿永の内乱



人質だった義高の殺害を企てた。これを知った頼朝と政子の娘の大姫が義高に伝えると、同年（改元して元暦元年）四月、義高は鎌倉を逃れる。頼朝は怒って追手を差し向け、武蔵国入間川原で義高を討った。大姫は嘆き悲しみ、憤った母の政子は義高を討った家人を梟首（きょうしゅ）するが、大姫はその後も憔悴を深め、後にわずか二十才で亡くなる。

平氏は屋島に御所を置く

過ぎし寿永二年十一月、源義仲に院御所・法住寺殿を襲撃された平氏は、安徳天皇と三種の神器を奉じて都を落ち、九州大宰府まで逃れたが、讃岐国屋島に本拠を置くことができたので、ここに内裏（だいら）（天皇御所）を置いた。

鎌倉から平家追討に出陣する

一方、一の谷の戦いで勝利した頼朝は、義経を自らの代官として都に残し、畿内の武士たちの掌握を図る一方、四国に逃れた平氏を追討すべく九州・四国の武士に平氏追討を求める書状を下して、土肥実平や梶原景時を山陽諸国に派遣した。

八月、平氏追討軍は鎌倉から出陣した。範頼を大将として、北条義時、足利義兼、千葉

常胤、三浦義澄、結城朝光、比企能員、和田義盛、天野遠景ら、有力御家人がこれに従って、追討軍は京に入った。平氏追討の官符を受領して西海へと赴く。

一方の義経は、後白河法皇より左衛門少尉、檢非違使に任じられ、また、九月には、頼朝の命令で上京した、河越重頼の娘（郷御前）を正室に迎えた。

政務・財政の機構をつくる

元暦元年（1184）十月、鎌倉に「公文所」（公文は公文書で、その管理を行なう）を開き、大江広元を初代の別当に任じる。前に述べたように、頼朝の旗揚げのとき、安達盛長の推挙で初めて頼朝に仕えた藤原邦通はこのとき、新造の公文所の吉書始で吉書（最初の行政文書）を書いた。

訴訟を司る問注所が開かれ、三善康信は初代執事（裁判事務の責任者）となる。この時期には、二階堂行政、平盛時から中下級の有能な官人達が才能を発揮する場を求めて鎌倉に下向するようになり、彼らが政権初期の官僚組織を形成した。

創設に貢献した大江広元は・・・

かつて朝廷に仕えた官人だったが、兄の中原親能が頼朝と親しかつた縁で鎌倉に下り、頼朝の側近となった人物である。公文所改め、「政所」となってからは、その別当として朝廷との交渉にあたり、実務家として深く関わった。『吾妻鏡』文治元年十一月十二日の条によると、頼朝が守護・地頭を設置したのも広元の献策によるものであるという。

また、その前月、十月に行なわれた勝長寿院堂供養に参列を許された京吏は、広元と邦通の二人だけで、頼朝の厚い信任を受け続けた。

頼朝の死後になるが、正治元年（1199）、後家の北条政子や執権・北条義時と協調して、大江は幕政に参与した。

平氏は滅亡する

元暦二年（1185）一月、西海の範頼から兵糧と船の不足、関東への帰還を望む東国武士達の不和などの窮状を訴える書状が届く。頼朝は安徳天皇や建礼門院の無事のため、軍を動かさず、九州の武士から反感をもたれぬように記した書状を出し、また九州の武士には、範頼に従って平氏を討つことを求めた。

また義経は、後白河法皇に西国出陣を奏上してその許可を得ると、讃岐国屋島（現・高松市）に向けて出陣し、二月十九日、平氏を海上へと追いやった（屋島の戦い）。三月二十四日、壇ノ浦の戦い（長門国赤間関壇ノ浦は現・山口県下関市）で平氏一門は敗れ、安徳天皇は入水。平宗盛（清盛の三男）、建礼門院（清盛の娘、安徳天皇の母）らは捕えられ、遂に栄華を誇つ平氏は滅ぼされた。

義経は一転して弾劾される・・・

義経の平氏追討で、侍所所司として義経の補佐を務めた梶原景時から、四月、義経を弾劾する書状が頼朝に届けられる。配下の武士達への勝手な処罰など、義経の専横を訴える報告が入ったため、五月、御家人達に対して、義経に従ってはならないという命令が出された。また頼朝に無断で、朝廷から任官を受けた関東の武士らには、東国への帰還を禁じた。

鎌倉に入れず帰洛した義経

その頃、義経は捕えた平宗盛父子を伴って相模国に凱旋する。しかし頼朝は義経の鎌倉入りを許さず、宗盛父子のみを鎌倉に入れる。腰越に留まる義経は、許しを請う書状を送

るが、頼朝は宗盛との面会を終えると、義経を鎌倉に入れぬまま、六月、宗盛父子と重衡を伴って帰洛することを命じる。

義経の追放に走る・・・

そのため、義経は頼朝を深く恨み、一方頼朝は、対抗して義経の所領を全て没収した。義経は近江国で宗盛父子を斬首し、重衡は東大寺の使者に引き渡されたのち、木津川畔で斬首された。

頼朝は八月、義経と結んだ叔父・行家の追討を側近の佐々木定綱に命ずる。

源行家は源為義の子、義朝の末弟で、かつて諸国の源氏に以仁王の令旨を伝え歩いて決起を促した人物である。しかし頼朝に与せず、甥の源義仲の幕下に走ったこともあり、ついで義経と結んだためである。

都は天災に苦しむ

元暦二年（1185）七月九日、大地震に襲われた京都では、多くの建物が倒壊し、その後も余震が続いた。摂政・近衛基通（基実の子）が「近日武を以て天下を平げらる、文

を以て治むるは宜しきに似るか」（『山槐記』八月十四日条）と主張し、「文治」の号が採用されて、改元が行なわれる（文治地震）。

大仏の開眼供養に行幸

文治元年（元暦二年8/14改元）（1185）八月二十七日、後白河院は大仏の開眼供養のため、公卿・殿上人を引き連れて東大寺に御幸する。翌日の供養には多数の群集が集まり、盛大に執り行われた。鍍金されていたのは顔だけで未完成だったが（『玉葉』八月三十日条）、後白河院は正倉院から天平開眼の筆を取り出すと、柱をよじ登って自らの手で開眼を行った（『山槐記』八月廿八日条、『玉葉』廿九日条）。

『玉葉』と『山槐記』は・・・

『玉葉』は、関白や太政大臣を歴任した九条兼実の公私にわたる記録で、長寛二年（1164）から正治二年（1200）に及ぶ。この時期は院政から武家政治へと政治体制が変動した時期で、源平の争乱についても多数の記述がある。また当時の公家の日記は、宮中行事を遂行するための所作など（『有職故実』）を後世に伝える目的もあつたので、『玉

葉』には、宮中における儀式の次第が詳細に記されている。

山槐記は、内大臣を務めた中山忠親の日記。現存するのは、仁平元年（1151）から建久五年（1194）まで、忠親は後白河院や源頼朝に重用され、平氏の興隆から全盛、滅亡の時期にあたる。

義経は頼朝追討の院宣を・・・

文治元年（1185）、九月に入ると、義経の京での様子を探るため、梶原景季（景時の嫡男）を遣わし、その報告を受けた頼朝は、義経と行家が通じていると断じ、義経を誅すべく家人を京に送る。対する義経は、後白河法皇に頼朝追討の勅許を強く求めた。法皇はその圧力に負けて義経に宣旨を下した。

一方、鎌倉に在った頼朝は、源氏一門や多くの御家人を集めて、父・義朝の菩提寺・勝長寿院落成供養を行っていたが、十月二十四日の夜、朝廷の頼朝追討宣旨に対抗して、御家人達に即時上洛の命を出した。

義経の追討はつづく

自ら出陣することを決めた頼朝は、行家と義経を討つべく鎌倉を発ち、駿河国黄瀬川に着陣した。しかし義経側には頼朝追討の兵が集まらず、彼は、郎党や行家と共に戦わずして京を落ちた。一度は海路で西国を目指したが、暴風雨に会って船団は難破し、一行は散り散りになってしまった。

十一月十二日、義経の舅（正妻の父）に当る河越太郎重頼の領地が取上げられる。一部は重頼の老いた母が預かることになったが、重頼の娘婿も所領などを取上げられた。

静御前を連れて吉野に

十七日、義経は郎党や愛妾の白拍子・静御前を連れて吉野に身を隠したが、静御前が捕らえられて鎌倉に送られた。

文治の勅許

十一月廿五日甲辰、頼朝の代官として、千騎の兵を率いて入京した北条時政は、頼朝の腹心となった大江広元の献策に基づいて、廿八日、吉田経房卿（六条・高倉西天皇の藏人を務め、平清盛の知遇を得ていたが、のちに頼朝の友人となった）と会見して、頼朝が、諸国の

国衙・荘園に守護・地頭を設置することの許可を申し入れた。廿九日戊申。後白河法皇はこれを受入れられた（文治の勅許、文治元年十一月二十八日）（1185/12月21日）。

遡る寿永二年（1183）十月、源頼朝に対して朝廷は、東国における荘園・公領からの官物・年貢納入を保証し、東国支配権を公認（寿永の宣旨^{せんし}）した。さらに文治の勅許によって、守護・地頭の任免権が頼朝に託されたので、幕府の権力は確固たるものとなった。

御恩と奉公

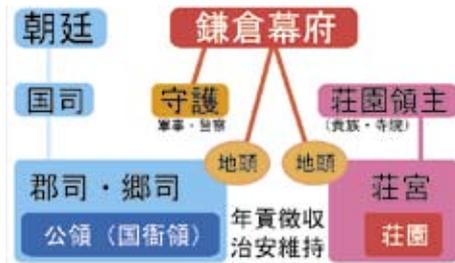
主人が従者に与えた利益を「御恩」といい、従者が主人に与えた利益を「奉公」という。武士間の主従関係は互恵的で、平安時代中期～後期から、この関係が徐々に形成されたが、本格的に「御恩と奉公」が成立したのは、源頼朝が関東武士の盟主＝鎌倉殿となつてからである。その後、幕府成立の基盤として機能し、室町幕府や江戸幕府にも引き継がれた。

地方の警察権の行使や、御家人に対する本領安堵、新恩給与を行なう権限は、鎌倉幕府成立の重要な画期として位置づけられる。

頼朝が御家人たちを守護・地頭に任命して「御恩」を与え、それに対して御家人たちは頼

朝に「奉公」するという関係ができたので、地頭は荘園や公領に置かれ、土地が与えられて年貢を徴収する。

また守護は国ごとに置かれ、謀反人や殺人犯を取り締まるなどの軍事・警察の職務をもって、現地の治安維持にあたる。彼らを任命する頼朝は、国の軍事・警察の全体の責任者となるので、このとき幕府は、国王＝天皇のもとで国の軍事・警察を担当する機関となり、土地を仲立ちとした封建的な主従関係がここに成立した。



満州への旅

深瀬 克

昭和19年(1944)生まれの私の周囲には、旧関東州、満州で生まれた友達が何人かいる。70歳を前にして『自分の生まれたところを見てみたい』と言う話が出た。尖閣問題などで日中関係が悪化している最中、いささか行きにくいとの思いもあったが、満州は日本の明治期以降の歴史にとって重要な意味を持つ地域であり、気が置けない永年の仲間と一緒に、良いチャンスと思つて私も同行する事にした。しかし、予想通りと言おうか、厳しさばかりが印象に残る旅となつてしまった。



1. 「爾靈山」「にれいざん」

「明治天皇と日露大戦争」、これは私が中学1年のころに見た映画の題名である。この映画を通して日露戦争における「203高地」・「旅順攻略作戦」・「日本海海戦」などについて知ることができた。『天気晴朗なれど波高し』とか、『皇国の興廃この一戦にあり、各員一層奮励努力せよ』とか、『木口小平は死んでもラッパを離しませんでした』などの言葉を覚えたのもこの時だった。東郷平八郎率いる日本艦隊が、ロシア・バルチック艦隊を潰滅させた日本海海戦のシーンは、血沸き肉踊る思いで見た覚えがある。

こうした思い出を胸に秘めながら、旅順口(大連市の西部)を見下ろす203高地へ登つた。203高地は標高203mのゆるやかな山である。大変蒸し暑かつたので観光客相手の小型バスで登ることも考えたが、先人たちが苦労して攻略した山なので、敬意を表して歩いて登る事にした。中腹には、4km先の旅順口に向かって28cm砲が据え置かれていた。旅順口に停泊しているロシアの戦艦を攻撃した大砲である。(但し、当時使用した現物ではない。)頂上に登ると日本軍が建てた砲弾をかたどつた忠魂碑が



大変蒸し暑かつたので観光客相

あり、「爾靈山」(二〇三)と書かれていた。二人の息子をこの戦争で亡くした乃木希典大将が漢詩を作り、その中で203高地を「爾靈山」と名付けたことによるのだそうだ。

しかし、この説明板には中国語・英語・日本語の説明書きがあり、『日本軍国主義による罪の証拠と恥の柱となつてゐる』と書かれていた。隣りにいる中国人もこれを読んでゐるので、自分が日本人だと分つたらどんな反応を示すのか分らず、緊張しつつ「ここは中国だぞ」と言い聞かせている自分がいた。

2. 偽満州国

満州国は1932年(昭和7年)に中華民国からの独立を宣言し、ラストエンペラー愛新覺羅溥儀が即位した。しかし現在の中国は、満州国は日本が作った傀儡かいらいであつて独立国としては認められない、との立場をとつて、「偽満州国」と呼んでいる。満州国の首都であつた新京は現在長春市となつており、ここには当時建てられた建築物が、「偽満州国務院(国会議事堂)・偽満州国軍事部」・「偽満州皇宮博物院」などとして残されていた。「偽満州皇宮博物院」の入口には、3カ国語による説明文が長々と表示されていた。こなれていない日本語だったが、概略次のような内容であつた。

『日本帝国主義者が中国東北部を占領し、その赤裸々な侵略犯罪行為を覆い隠すために、傀儡政権満州国を打ち立てた。この偽満州国の軍事・政界の大臣として、売国奴と親日家を集めて就任させた。これらの人たちは、個人的な目的のために靈魂や民族の利益を売り渡し、日本侵略者の道具となり手先となつた。』

ある民族と国家が外来侵略者により存続の危機に面したとき、犠牲を惜しまず勇敢に戦い民族の英雄になつた人もいれば、民族を裏切つて哀れを乞ひ、民族の犯罪者になつた者もいる。その理由をよく考えなければならぬ。警鐘のために、偽満州国の高官になつた人たちの振舞いをここに展示する。』

これを現地のお母さんが子供に読んで聞かせているのを目の前にし、「偽」満州国の表示がたくさんある長春は、満州国を否定する空気が充満しているように感じられた。



偽満皇宮博物院

3. 戦勝記念日

8月15日は中国では「戦勝記念日」であり、各職場で記念式典を行っているらしく、丁度その場に出くわした。『偽滿皇宮博物院紀念抗日戰爭勝利68周年系列活動』・『勿忘國恥、振興中華、樹愛國之情、立報國之志、世界要和平、人類要發展』などのスローガンが大きく掲示されており、戦時中の日本で叫ばれていたスローガンと似ているなど感じた。集まっていた100名前後の人たちにはペットボトルの飲み物が配られ、彼らは普通に談笑していた。間もなく式典が始るところであったが、万一トラブルが発生する事を懸念し、急いでその場を離れた。



戦勝記念式典会場

4. 満州の夕日

「中国で新幹線に乗る」と話したら、『事故つたら、すぐに穴を掘って埋められちゃうぞ』と言われた新幹線に、ハルビン（哈爾濱）から長春まで乗った。車体には「和諧号」と書かれている。対外政策と異なり、国内的には「和諧」を求めていることが単純明快だった。満州の新幹線にはトンネルは全く無く、大きな鉄橋も無く、両側に延々と広がるトウモロコシ畑の中をただひたすら走るのみであった。線路がカーブする事も無く、時速の表示は最高307kmになっていたが、揺れもほとんど無く、不安を感じるような事も皆無であった。

丁度夕日が地平線に沈むのが車窓から見えた。その夕日は、ギンギンキラキラしたものではなく、ヨード卵の黄色をした月のように見えた。このように見える理由は何だろうか。黄砂の影響か、それともPM2.5か、水蒸気か、はたまた列車の窓ガラスの影響か、残念ながら理由は分らなかった。

『ここは御国を何百里 離れて遠き満州の 赤い夕陽に照らされて 友は野末の石の下』

この歌の時代の夕日はどのように見えただろうか。



新幹線「和諧号」

5. 中国の病院

旅の途中、S君が階段で蹴躓^{けつす}き、脛の骨が見えるほどのケガをしてしまったので、大きな病院の救急外来に飛び込んだ。受付事務も順調に進み、第1次診察で応急処置を行った上、急診科縫合室に行った。ここで傷口の周囲に麻酔を打ち、ゴミを除去し消毒をした後、4針縫った。その後アレルギーの検査のための注射をして安全を確かめた後、破傷風予防の注射を打った。この間待たされることはほとんど無く、掛かった時間は2時間だった。最後に支払った医療費は約2000円、日本円に換算するとわずか3400円。健康保険による診療でもないのに、この金額で済んだことに驚くと同時に、さすが共産主義国家の医療費だなあと感心した。アメリカでこれだけの治療を受けたら、とてもこんな金額で済まないことは確かである。皆さん、ケガをするなら中国で！

6. 葫蘆島港

満州からの引揚船が出港したのは葫蘆島であったと、満州生れの2人は両親から聞かされてきた。大連港から帰国しても良さそうに思えるが、当時大連はソ連が占領していたため使用できず、やむなく葫蘆島経由になったのだそうだ。今回の旅行における最後の訪問

地となった葫蘆島港は、大連がある遼東半島の西側にある遼東湾の北西部にある港で、昭和21年（1946）から23年までの間に、ここから105万人あまりの日本人が、文字どおり命からがら引揚船に乗って帰国した。S君は母親から、『葫蘆島の港には赤ん坊の死体が浮いていた』と聞かされたという。

1日借り切ったワゴン車の運転手は、『葫蘆島市内の案内はするが、海岸まで案内するとは契約していない』と主張し、追加料金を大声で要求してきた。中国語の堪能なY君も負けずに大声でやりあうが聞き入れようとしなない。日本への悪感情が遠因かとも思い、Y君に無理しないようにと伝えた。結局行った所は葫蘆島港ではなく、近くの海水浴場であった。現在葫蘆島港は中国海軍の原子力潜水艦寄港地になっており、写真撮影が禁止されているとの情報もあるので、運転手は意識的に案内しなかったのかもしれない。

葫蘆島の海水浴場から東の海を望みながら、当時やつと葫蘆島にたどり着いた引揚者の人たちの思いを偲ぶと同時に、ついに今回葫蘆島港に来れなかった無念さどが交錯し、複



葫蘆島の海水浴場

雑な思いの最終訪問地であった。

7. 円と元

通貨の単位は、日本は「円」、中国は「元」であるが、ホテルに表示している通貨の換算表には、どちらも「¥」マークが表示されている。中国の紙幣を良く見ると「元」とは書いてなく、「圓：Yuan」と書いてある。我々は「元」をゲンと読んでいるが、中国語では「Yuan」であり、日本の「Yen」と近い。そういえば現在の中国語で「圓」は「園」と書かれている。即ち、「元」は「圓」と発音が近いので、簡略字として使われているらしい。

そこで日本の「円(圓)」の由来を調べると、中国の「圓」がルーツと書いてあった。「¥」を横取りされた様な気持ちを持ったが、中国がルーツでは仕方が無い。ちなみに、韓国の「ウォン」も「圓」がルーツと書いてあった。これも彼らが中華思想を持つ理由の一つかと思った。

(2013. 8. 12~17)

「市民フォーラム」は・・・

地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によつて市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。
地域情報紙「市民プレス」は市民フォーラムが編集・発行し、無料で配布しています。

読者の「オピニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。

TEL090 (3048) 5502

編集部 原宛にどうぞ